

こころ

夏目漱石

私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う氣にならない。

私が先生と知り合いになったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端書を受け取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費やした。ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勧めない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとするれば彼は固より帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分日数があるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがつて

一人ぼっちになった私は別に恰好な宿を探す面倒もたなかったのである。宿は鎌倉でも辺鄙な方角にあった。玉突きだのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はそこにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

11.54659pt

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燻ぶり返った藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、この辺にこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が銭湯のように黒い頭でごちゃごちゃしている事もあった。その中に知った人を一人ももたない私も、こういう賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寝そべってみたり、膝頭を波に打たしてそこいらを跳ね廻るのは愉快であった。